大江健三郎 初期封印小説論！

寓話と遅延

大塚英志

初期小説はなぜ封印されたのか？？

初期大江の政治を読む。物語を読む。

寓話と遅延

大江健三郎初期封印小説論

大塚英志

星海社

409

SEIKAISHA SHINSHO

序章

大江健三郎初期封印小説とは何か

本書は主として大江健三郎の初期作品群を「封印作品」を含めて一つの問題系の中で考えていくものだ。

本書では初期作品とは「個人的な体験」（新潮社、一九六四）に至るまでを指すが、それは多くの大江論ではほぼ共通の理解だろう。同作に先行する「空の怪物アグイー」（『新潮』一月号、一九六四）で障がいを持って生まれた赤子を見殺しにしたことから一転して、生かし育てようと展開を変えたことが大江自身の「選択」であり「成熟」と受け止められてきた。本書もまた「個人的な体験」を以て「初期」の末尾とするが、しかしそこで大江の文学的来歴に読点を打つのは別の理由からだ。

それは本文に譲る。

一方、「初期作品」の起点は一九五四年四月、東京大学文化二類に入学後とする。

無論、大江の文学活動は一九四七年、故郷である愛媛県喜多郡大瀬村大瀬中学校以前まで確実に遡れる。

大江自身が、十歳の時、「敗戦直後の、中国・四国地方を販路とした国語教育のパンフレット」に掲載された詩の一節、

雨のしずくに／景色が映っている／しずくのなかに／別の世界がある

を紹介していることがよく知られる（大江健三郎「しずくのなかに／別の世界がある」『大江健三郎小説Ⅰ』月報、一九九六）。これが活字になった最初の大江作品だと当人は述懐する。

中学時代には同校生徒会誌に批評「『罪と罰』について」を発表したとされる。

活発な文学活動が確認されるのは一九五〇年四月、愛媛県立内子高等学校に入学後である。この年、同校の生徒会雑誌『梅の木』に太宰治論などの批評とともに詩「赭い秋」「初夏の夏」を発表する。

一九五一年四月には愛媛県立松山東高校に転校、自ら編集にも当たった文芸部誌『掌上』にやはり批評とともに詩「午後の素描」など数篇の詩を発表している。この時期、未発表の小説もあったとされるが詳細は不明である。

このように大学入学以前の大江の文学活動は批評と詩が中心であり、案外とこのことは彼の文学者としての資質を暗示している気もするがここでは踏み込まない。他方で中学や高校

の学内雑誌への寄稿は東大入学後、「奇妙な仕事」(『東京大学新聞』7号、一九五七年五月二二日)で注目され文芸雑誌が発表の場として開かれるまでは、学内雑誌や学内公募が大江の文学活動の中心であったことと連続していて、その「文学」の想定された届く範囲の狭さとしても注意されていい。

東大入学後も「奇妙な仕事」に至るまでは、大江は学内での演劇脚本の公募に応じて繰り返し投稿している。「天の嘆き」(一九五四)、「夏の休暇」(一九五四)、「死人に口なし」(一九五六)、「獣たちの声」(一九五六)などの戯曲を学内公募に投稿して佳作などに入賞しており題名のみは知られるが原稿の所在は不明である。「死人に口なし」は文壇デビュー作である「死者の奢り」(『文學界』一九五七年八月号)として小説に書き換えられている。「夏の休暇」は題名のみから想像すれば、火山への夏の旅行を描く「火山」と関係があるのかもしれない。

他方で、東大の校内雑誌や雑誌『文藝』による全国学生小説コンクールへの小説の投稿が始まるが、やはり「校内」あるいは「学生」という枠組を所与としたものである。現在のように文芸誌の新人賞が必ずしも制度化していない時代で「学生」の文学活動の場が限定されていたとはいえ、やはり初期大江文学には「学内」「学生」という属性は看過できない気がする。そのことは本書で幾許か問題とする。

その上で本書のタイトルとして、新書という本書の刊行形式の必要上、「封印作品」といさ

さかジャーナリスティックに名付けた小説群について最低限の概要を整理しておく。

本書では「封印小説」とは何らかの理由で読者が読むことが困難な状況に置かれた大江の小説群を指す。

それは、①大江の意思によって公表そのものが見送られたもの②新人賞等の公募原稿で題名は確認されるが原稿の存在は不明のもの③雑誌掲載等で活字化されながら「全集」類への掲載が見送られたものの三つに分類される。

このうち①に属するのが大江の回想のみに言及される、松山東高校時代に友人となった伊丹十三（いたみじゅうぞう）を読者として想定した「行く力　For qui Va」などで、原稿の所在は不明で内容の一部のみが大江自身によって語られる。

そして二〇二六年、大江の学生時代の下宿大家の遺族によって存在が明らかになったのが「暗い部屋からの旅行」（小説末に「一九五五・五・十九」の記載あり）、「旅への試み」（同じく「一九五七・五」の記載）の二作である。

これらが大江の意思によって封印されたのに対し、②に属する公募原稿についてはこれは入賞されれば活字化される可能性があったのであるから公表の意思があったと考えられるので事情が異なる。既に言及したように題名のみが伝わるが、確認されるのはいずれも『文藝』の「全国学生小説コンクール」に応募した「優しい人たち」（一九五五年第三回佳作）、「火葬

のあと」（一九五六年、選外佳作）の2篇である。

既に言及した「公募」に応じた戯曲類も「小説」ではないがここに含めていいだろう。

事情がより複雑なのが③である。

「全集」類に収録されなかった先品群であり、大江の意思によって新たに読者の目に触れることを長く見送られた作品である。

この場合「全集」とは『大江健三郎全作品』第Ⅰ期全六巻（新潮社、一九六六～一九六七）、同・第Ⅱ期全六巻（新潮社、一九七七～一九七八）と『大江健三郎全小説』全十五巻（講談社、二〇一八～二〇一九）の二つを言う。ともに「全」と言いつつ、①②に該当しない、一度は雑誌掲載されたり、書籍化されながらこの二つの「全集」に掲載が見送られた作品あるいは小説群がある。

『大江健三郎全作品』の内、本書が「初期」として定義する「個人的な体験」までを収録した第Ⅰ期全六巻に、一度は活字化されながら収録されなかったのは、「火山」（『学園』一九五五・九）、「黒いトラック」（『学生生活』七月号、一九五六）、「石膏マスク」（『近代文学』九月号、一九五七）、「戯曲　動物倉庫」（『文學界』十二月号、一九五七）、「夜よゆるやかに歩め」（『婦人公論』一月号～六月号、一九五九）、「部屋」（『新潮』六月号、一九五九）、「報復する青年」（『別冊文藝春秋』一九五九・十二）、「政治少年死す　セヴンティーン第二部・完」（『文學界』二月

号、一九六一）、「ヴィリリテ」（『小説中央公論』八月特大号、一九六二）、「善き人間」（『新潮』一〇月号、一九六二）、「大人向き」（『群像』五月号、一九六三）である。

この内、「封印」の事情が喧伝されてきたのが「政治少年死す　セヴンティーン第二部・完」である。作中に描写され連想された右翼団体からの抗議を受け初出誌に謝罪広告が掲載されたことで、政治的に封印されたと理解されてきた。公共図書館所蔵の掲載誌で読むことができないわけではなかったがその部分のみ何者かによって切り取られていることも少なくなく、ぼくも含め大江ファンは、数種類刊行されていた「海賊版」でこの作品を読むのが常であった。

「火山」は大学時代の大江の最初に活字になった小説で、東京大学教養学部学友会機関誌『学園』に学内公募の「昭和三十年度銀杏並木文学賞」入選作として活字化された。その誤植の多さに当時の大江が激怒したとされるが、二年後の「動物倉庫」では誤植作家の汚名をきた自分を「戯画化」しているので、それが封印の理由とも思えない。「黒いトラック」は学生向けの投稿雑誌『学生生活』に掲載され、雑誌の性格からすれば、投稿作品と思われる。「黒いトラック」封印の理由は不明である。「火山」「黒いトラック」の二作は、公共図書館等で閲覧しやすい大手出版社の文芸誌ではない媒体での発表だったため、一般の読者には読むことが難しかったが国会図書館などで複写することが可能で研究者には相応に読まれていた。

「夜よゆるやかに歩め」は婦人雑誌に連載され、大江唯一の大衆小説と言えなくもない。雑誌連載後、新書形式を含め二度、刊行されているが『全作品』には収録されなかった。

これらのうち、「政治少年死す」の収録が話題となった『大江健三郎全小説』にも収録されなかったのが「火山」「黒いトラック」「夜よゆるやかに歩め」の三作品である。つまりこの三作は大江が生前に「全集」収録をよしとしなかった作品である。

これ以外に『全作品』『全小説』に収録が見送られたものに一九五七年から一九六〇年にかけて書かれたテレビドラマ、ラジオドラマのシナリオがある。ラジオドラマ「遊園地」（朝日放送、一九五七・一一・二一放送）、ラジオドラマ「北ノ島」（NHKラジオ第一放送、一九五九・三・二〇）、オペラ「暗い森」（NHKラジオ第二放送、一九六〇・三・二〇）、テレビドラマ「オタスの森―われらのなかのギリアーク人―」（NHK教育テレビ、一九六〇・一一・六）、「飼育」（日本テレビ、一九六一・四・一六）などが確認できる。この内、「北ノ島」は『放送文化』一九五九年五月号に「放送劇台本 北ノ島」として掲載されている。また「オタスの森―われらのなかのギリアーク人―」は国会図書館デジタルコレクションで台本の原本が閲覧できる一方、副題無しの「オタスの森」として『放送文化』一九六一年一月号に掲載されている。『放送文化』該当号は国会図書館で閲覧可能である。

「飼育」脚本は大島渚（おおしまなぎさ）によって一九六一年に映画化された田村孟（たむらつとむ）のもの【図1】ではなく、山（やま）

本薩夫によるテレビドラマの脚本を大江が書いたものであるが所在は確認できない。「飼育」は筒井敬介脚色（ＮＨＫ、一九五八・一〇・一五放送）、井上廈脚本（ラジオ東京、一九六〇・一一・五放送）などのラジオドラマがあった。他にも戯曲「動物倉庫」をラジオドラマ化したもの（ラジオ東京、一九五八・三・四放送）、脚本は不明だが「偽証の時」（ラジオ東京、一九五八・九・五～九・七放送）が確認できる。

また、大江ではなく、矢代静一脚本によるラジオドラマ「死者の奢り」（ＮＨＫ、一九五八・七・二五放送、一九五九・三・一三再放送、『放送文化』四月号、一九五九）、白坂依志夫脚本「われらの時代」（蔵原惟繕監督、日活、一九五九）、同じく白坂による「偽証の時」を原作とする「偽大学生」（増村保造、大映、一九六〇）、これは原著が本書の扱う「初期」からは外れるが、撮影に至らなかった別役実によるＡＴＧ映画シナリオ「万延元年のフットボール」（一九七四）【図2】などもある。ラジオドラマ「死者の奢り」は一九六八年に再制作されている。これら、大江の手



図1　田村孟「飼育」シナリオ
（東京映愛連、一九六一）

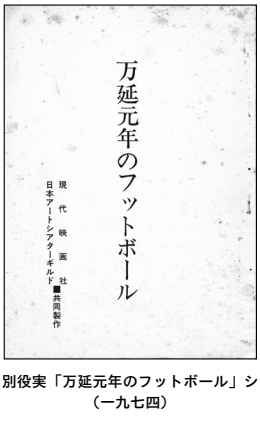

図2　別役実「万延元年のフットボール」シナリオ
（一九七四）

による戯曲、脚本類は第三者によるものも含め、大江作品の中で最晩年の『水死』（講談社、二〇〇九）に至るまで、作中で映画や舞台の脚本制作がしばしばモチーフとなっていることを踏まえると、本書では扱わないが、大江にとって小説とそれ以外のメディア様式との互換関係は案外と重要な問題系を考える資料だと思われる。

本書はこれらの初期封印小説のうち、発見された二作を含む『全作品』及び『全小説』に収録が見送られた小説群を大江の初期の小説活動に配置し直す試みである。そのことで、大江健三郎の小説の「方法」がいかに立ち上がり、そして、一度は隘路（あいろ）に向かう過程をトレースする。

ここで読者への便宜を兼ねて本書の構成と章ごとの議論について概観しておく。

第一章では大江の「封印作品」を中心とする最初期作品の「寓話性」を問題とする。この場合の「寓話」とは何かの教訓を目的とするイソップ童話のような小咄ではなく、現実の出来事に直接的に言及することを迂回する、比喩としての「寓話」である。中でも、新発見小説や「政治少年死す」さえ収録された『全小説』にも収録されなかった「火山」「黒いトラック」はその意味で「寓話」として意図して徹底して設計されている。

だが、現在の私たちはこの「寓話」が指し示す政治的出来事が全く見えなくなっている。

そもそもぼくは一九五八年、つまり、新発見小説や「火山」「黒いトラック」が書かれた後に生まれている。だからぼく自身が初期大江作品の書かれた背景を経験しようがない。それが見えないため最初期大江作品は前提を知らずに読んでしまえば、具体的な現実への批評でなくメルヘン的な「寓話」にさえ見えてしまう。だからまず、第一章では大江が彼を取り巻く政治的現実をいかに参照し「寓話化」したのかを時系列で検証する。その手続きで初期大江作品が書かれたリアルタイムの文脈を最低限、回復したい。そのことで初期大江の小説が当時の学生運動や、それを主導した日本共産党の活動方針をどう「寓話」化しているのかを確認する。それは小説を読むという行為において否応なく政治的文脈が所与のものとしてあった時代の「読み」の再確認と恢復の作業である。無論それは極めて粗雑なものだが。

第二章では初期大江が政治的体験の「寓話」化を出発点に、彼自身の政治への距離や違和や賛同の手段としてあった小説が、次第により普遍的な問題を主題とする「寓話」へと構造化されていく過程を追う。

この場合、構造化とは二つの「運動」からなる。一つは、大江を取り巻く小さな政治的現実の「比喩」や場合によっては当て擦りでさえあった要素が、繰り返し用いられる中でより多義的で豊穣な意味を纏っていき反復され使われることで、大江自身によって小説の構成単位として発見される過程としてある。こういった構成単位を本書では便宜上、レヴィ＝スト

ロースに倣って「神話素」と呼ぶ。あくまで便宜上である。重要なのは、例えば「水死体」という表象が作品ごとに繰り返されることでどういう意味を持ち、つまり、「神話素」となり、それが他の「神話素」と連鎖しながら大江が自身の小説世界をどう設計していくかを概観することにある。

こういった「神話素」の連鎖や対立からなる構造に対し作中の物語を統辞する構造も同時に問題とする。それは大江の「寓話」性が同時に、物語としての「形態」の獲得へと向かうからである。本書では便宜的に、レヴィ＝ストロース的な神話素の束と対立からなる様式を「構造」と呼び、物語の進行を管理するウラジミール・プロップ的な原理を「形態」と呼ぶ。しかし、当然だが初期大江において「神話素」は次第に手繰り寄せ獲得されるものであったように、「形態」を構成する要素もまた同じように発見されて手繰り寄せられるものである。物語の動線上で、次の展開に機能する登場人物とその振る舞いをプロップは「行為項」と呼んだが、大江の小説には限定された振る舞いを属性とする登場人物が繰り返し登場する。この「行為項」の作用によって大江の小説はしばしば物語の展開に大江固有の偏差が生じる。もちろん、物語が「文法」によって規定されるといっても小説、まして文学はそれをいかに歪めていくかという手続きであるが、大江の場合も大江的な偏差からなる形態を徐々に獲得していく。これが第二の構造化の「運動」である。

このような構造と形態の歪みからなる構成物を大江が初期作品に濃厚な直截的な寓話を出発点として豊穣なものとして獲得していく過程を追うのが第二章の趣旨である。したがって、本文中でも再度、注意を促すことになるが、この章は、初期大江の小説を「構造分析」してその意味を解釈するのではなく、大江健三郎の小説という構造体が生成する過程を追うものである。

つまり「構造」や「形態」そのものが常に生成し更新される「動態」だということである。そしてもう一点、注意して欲しいのは、このような大江的な偏りのある「構造」「形態」こそが大江の「文体」である、ということだ。大江はその最初期から自身の「文体」を構築することに腐心しているが、「文体」とは単語の選択やそれが配置される文章構造における作家固有の偏差のみならず、そのような文章によって生成する「構造」そのものの偏差もまた「文体」であると考えられて然るべきだ。大江の文学的格闘はまさにこの構造レベルでの「文体」の獲得にある。

第三章では大江の生成する小説が常に可能世界の発動として起動するという問題を扱う。大江における自身の既出の小説の「書き直し」は大江論の基礎のようなものだが、それは当初は、未だ書かれていない世界線、そして次には、既に書かれた世界線に対する可能世界の起動であることを輪郭づける。無論、エミール・ゾラの実験小説論まで遡れば近代小説の本

来は、仮設された実験場としての物語世界のなかでの仮説実験となる。だが大江の場合、可能世界の発動それ自体が作者の愉悦のような印象さえある。世界線を更新し乗り換えていくという運動そのものが大江にとって小説を描くという行為なのである。

この時、世界線の乗り換えのためのトリガーとなるのが、小説の冒頭にしばしば配置される「遅延」である。この「遅延」による可能世界の創出という初期大江の「方法」について整理した上で「個人的な体験」が明らかな可能世界論であることを問題視し、そこに初期大江の「方法」への閉塞を見る。

終章は蛇足のようなものだが、初期大江が「構造」を引き寄せ「遅延」による可能世界のフォーディズム的量産という隘路に陥った懸念を改めて描く。無論、それではいささかバッドエンドな批評となるが、初期大江自身が閉塞された状況への批評を主題としつつ、それを描き出すため構築した批評的機械＝方法の中に「旧約聖書」で描かれる鯨に飲み込まれたヨナの如く取り込まれた様をこそ確認したい。当然だがそれは初期大江の決定的な隘路だが、過剰な世界線の創出と乗り換えによる脱出劇という「初期大江」終結以降の大江文学の出発点の確認の手続きでもある。

このように「初期大江」を整理しつつ、その先を読んでいく前提を提示することが本書の一つの目的である。もう一つは、初期大江が自身の環境への寓話に始まり「神話素」を引き

寄せ構造や形態という「文体」を獲得し、小説を書くための自身の「方法」を発見し、更にそこに閉塞するまでを描くことで、小説家が小説の方法を獲得する筋道を追体験してもらうことも目的である。本書がぼくの物語創出マニュアルである『ストーリーメーカー』などと同じ新書レーベルで刊行される意図は多少は、そこに見出せるだろう。

年表

年月	作品	背景
1949年8月29日		ソ連、カザフスタンのセミパラチンスク核実験場で初の原爆実験「RDS-1」に成功
1952年3月29日		小河内村で山村工作隊検挙（渡邉恒雄・高史明・きだみのる・網野善彦らが「登場人物」）
1953年4月		在日米軍、浅間山に山岳戦演習地設営を発表
1953年7月16日		東大地震研究所の反対で設営中止
1954年2月29日		山田初市、東大監禁事件を訴える
1954年3月14日		3・14事件（東大自治寮の捜査、学生幹部逮捕）
1954年4月		**大江健三郎、東京大学文科二類入学**
1954年9月	**「天の嘆き」**（戯曲）、東京大学学生演劇脚本応募	お茶の水女子大学自治会委員長・遠藤和子、自死
1955年	**「夏の休暇」**（戯曲）、東京大学学生演劇脚本応募	
1955年1月	**「優しい人たち」**（短編小説）、『文藝』第3回全国学生小説コンクール佳作	
1955年3月		米軍、立川航空基地拡張を発表（砂川闘争の発端）
1955年5月19日	**「暗い部屋からの旅行」**脱稿	

1955年7月	**「火山」**脱稿	
1955年7月27〜29日		六全協（日本共産党第6回全国協議会）暴力革命路線を放棄
1955年9月	**「火山」**東大教養学部学友誌『学園』銀杏並木文学賞受賞・掲載（誤植事件）	
1955年9月13日		立川航空基地拡張のための強制測量、警官隊と砂川町反対派・学生らが衝突
1956年3月	**「火葬のあと」**（短編小説）、『文藝』第5回全国学生小説コンクールに応募。選外佳作	
1956年4月		**文学部仏蘭西文学科進学** 山下肇『大学の青春・駒場』で大江「火山」への言及
1956年5月5日		
1956年5月	選外佳作となった**「火葬のあと」**の選評が『文藝』五月号に掲載	
1956年6月	**「黒いトラック」**脱稿／『学園生活』7月号掲載	
1956年9月	**「死人に口なし」**（戯曲）応募／**「獣たちの声」**（戯曲）入賞（「奇妙な仕事」原型）	
1956年10月12〜13日		**大江デモ参加**。砂川町第二次強制測量で衝突・負傷者多数

1957年5月	**「旅への試み」**脱稿	
1957年5月22日	**「奇妙な仕事」**東京大学新聞五月祭賞受賞、掲載	
1957年6月		**平野謙『毎日新聞』文芸時評で「奇妙な仕事」に言及**
1957年8月	**「死者の奢り」**（芥川賞候補）、**「他人の足」**	
1957年9月	**「石膏マスク」**	
1957年10月	**「偽証の時」**	
1957年11月	ラジオドラマ**「遊園地」**	
1957年12月	**「動物倉庫」**	
1958年1月	**「飼育」**（第39回芥川賞）	
1958年2月	**「運搬」**、**「人間の羊」**	
1958年3月	**「鳩」**	
1958年6月	**「芽むしり仔撃ち」**、**「見るまえに跳べ」**	
1958年7月	**「暗い川おもい櫂」**	

1958年8月	「鳥たち」	
1958年9月1日		小松川事件（李珍宇逮捕）
1958年9月	「不意の唖」、「喝采」、「戦いの今日」	

目次

序章　大江健三郎初期封印小説とは何か　3

第一章　政治と寓話
「暗い部屋からの旅行」「火山」を読む　25

第二章　明るい水死体
「黒いトラック」「旅への試み」から「奇妙な仕事」「死者の奢り」　103

第三章 「遅延」と可能世界
「空の怪物アグイー」と「個人的な体験」の間 243
補論 大江健三郎は戦争に遅れてきたのか 331
あとがき 370

次世代による次世代のための

武器としての教養
星海社新書

星海社新書は、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて、ここに創刊いたします。本の力を思いきり信じて、**みなさんと一緒に新しい時代の新しい価値観を創っていきたい。若い力で、世界を変えていきたいのです。**

本には、その力があります。読者であるあなたが、そこから何かを読み取り、それを自らの血肉にすることができれば、一冊の本の存在によって、あなたの人生は一瞬にして変わってしまうでしょう。**思考が変われば行動が変わり、行動が変われば生き方が変わります。**著者をはじめ、本作りに関わる多くの人の想いがそのまま形となった、文化的遺伝子としての本には、大げさではなく、それだけの力が宿っていると思うのです。

沈下していく地盤の上で、他のみんなと一緒に身動きが取れないまま、大きな穴へと落ちていくのか？　それとも、重力に逆らって立ち上がり、前を向いて最前線で戦っていくことを選ぶのか？

星海社新書の目的は、**戦うことを選んだ次世代の仲間たちに「武器としての教養」をくばることです。**知的好奇心を満たすだけでなく、自らの力で未来を切り開いていくための〝武器〟としても使える知のかたちを、シリーズとしてまとめていきたいと思います。

2011年9月

星海社新書初代編集長　柿内芳文

SEIKAISHA
SHINSHO